

コロナと学童保育 子どもの視点から
with コロナのなかで学童保育の生活づくりをどう進めるか

2020年9月12日(土)

上野琢也(現役教員)

1 突然の臨時休校、学校職員もパニック

2 臨時休校期間中の学校では

子どもの健康を守る環境の整備・備品の追加

コロナ感染が拡大した時の対応の確認

子どもの学習保障の在り方の検討

3 臨時休校明けの学校では

学習や活動の「孤業」化が進む

「はみ出す子」へのまなざし

4 臨時休校明けの子どもたちから見えてきたこと

物理的な距離をとる・とらせることが心の距離にもつながっているのではないか？

「三密を避ける」「ソーシャルディスタンス(フィジカルディスタンス)」と、メディアが取り上げる情報が先行し、子どもたち自身も守ろうとしていく過程で、友だちと適切に関われなくなってしまう子がいます。「物理的な距離と心の距離は別物だ」と私たち大人は理解できますが、子どもたちの成長の過程の中においては、物理的な距離を縮めることが心の距離を縮めることにもつながっているのかもしれない。

子どもたちが分断されることで発達への影響はないのか？

休み時間に一緒に居られない、給食を一緒に食べられない、力を合わせて学習や活動に取り組めない・・・そこにいるのに、関われないという状況があったとしたら、子どもたちは発達課題を乗り越える経験ができなくなるのではないかと危惧しています。子どもたちは関わり合いの中で成長していくはずで、いつまでも幼く、素直な存在ではありません。時にはぶつかり合い、時には反抗し、保護される立場から自分の足で立ち上がり「自立」を獲得していくはずで。

「学校は楽しいところだ」と子どもは思えるか？

現在の学校での優先順位はもちろん「子どもたちの健康・安全」が第一です。ところが、それを守るために子どもたちの気持ちや思いを二の次、三の次にしてしまうと、ただでさえ疲弊している子どもたちがさらにしんどくなってしまいます。私たち大人も上からの指示で余儀なくされている制限ですが、「仕方ない」と言わざるを得ない状況でも、子どもたちの気持ちや思いに共感し、制限の中でも「楽しいな」「うれしいな」と思えるような積み重ねが必要になるのではないのでしょうか。